



ふるさとのお話

14

ニイハオ 你好



絹産業 Silk

絹産業は、嘉興市の誇る伝統的な産業です。現在、市全体で70の絹紡績の企業があり、84種類の絹製品を市場に供給しています。特に絹糸は、広く海外に輸出され歓迎されています。



△繭の収穫風景。1985年は天候がよく、嘉興市の総生産量は3万4,000トンに達しました。



△嘉興絹紡績は、中国最大の絹織物工場です。この工場の製品は、「紅梅牌」の商標で知られ、優秀な品質だとして国家から金賞を授与されています。また、伝統的輸出品として、貴重な外貨を獲得しています。

神様と天狗の山づくり



EJUEの競争

昔、上野の国(群馬県)の山に悪いてんぐが住んでいて、人々に悪さをしていました。ある日、神々が集まって相談しました。それは、駿河の国と甲斐の国の境へ高い山をつくって、そこから四方を見渡し、悪い神や、いたずらてんぐを取り締まろうという相談です。それを聞いたてんぐは、「おい、そこに集まっている神様たち、わしと山づくりの競争をしないか。おれが勝つたら、おまえさんがたがつくった山は、壊してしまうというのはどうだ」と声をかけました。神々は、苦笑いしながら答えました。「よろしい。だが、おまえが負けたらここから追っ払ってしまうぞ」「ようし、一晩のうちにお前たちの山より高いのをつくるぞ」と、てんぐは地を掘り始めました。大きな仁王さんのような体で運ぶ

土は、もっこいっぱいです。負けるもんかと、どんどん高くしました。

逃げたてんぐ

てんぐは、悠々と掘っていましたが、ふと気がつく東の空が白白としています。あわてたてんぐは、もっこから手はずれて、土をこぼしてしまいました。「しまった!」と思いつつ、振り向いてみると、明々と夜が明けた平野の向こうに、神々がつくった山が、高く高く、天へ届きそうにそびえています。それを見ててんぐは、どこかへ逃げていってしまった。そのときてんぐがつくった山を榛名山、土を取ってへこんだ所を榛名湖、もっこをこぼした所を一番山というようになりました。神々がつくった山が富士山で、土は近江の国(滋賀県)から運びました。土を取った後の大きなくぼみが、琵琶湖になったのだとい

地名の由来

弥生 (吉原地区)



弥生村は明治二十二年に伝法村に吸収合併された村ですが、江戸時代に古郡氏が加島新田を開発したころは、既に村として成立していたようです。一説では江戸時代の初めごろ、伊藤弥生之助という人が開発したので「弥生村」と呼んだと言いますが、詳しいことは明らかではありません。

江戸時代から明治の合併まで、民家は一軒もなかったそうです。

こちら編集室

「地名の由来」での話。「江戸時代に村として成立して、明治時代まで民家が軒もなかった」というのは、矛盾しているのではと思ひ、執筆者の鈴木富男さんに聞いてみました。すると、「米が取れば、民家がなくても、幕府から村として認められる」とのこと。納得しました。